

# 世界遺産富士山における植生の観測体制の構築

## 【特徴】

世界遺産富士山の自然環境保全に寄与する知見を提供するため、森林限界のある五合目付近から上部の高山帯のモニタリングを開始した。今後の長期的調査により植生の動態とその機構の解明を目指す。

## 【活用が見込まれる分野】

- ・富士山の自然環境の保全
- ・世界遺産富士山の保存管理に係る情報提供

## 【成果】

富士山における植生の観測手法および解析技術の開発を通じて、長期的、広域的な観測体制の基礎が確立できた。

## 【内容】

### 1. GIS情報の整備

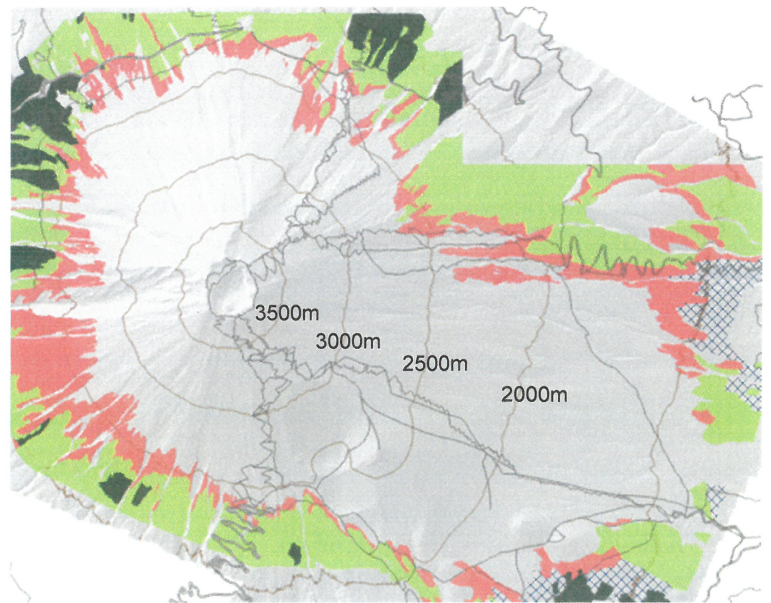
#### 目的と方法

富士山の植生変化を捉えるため、ベースラインデータを作成した。2008年に撮影された高解像度空中写真から3次元構造を復元し、オルソ画像と樹高に関する画像を作成した。それらを元に詳細な植生図を作成した。

#### 結果

得られた画像は樹種単位で判別が可能なほど高解像度であるため、優占樹種の変化や森林限界の上昇、雪崩による林分の崩壊など森林限界の変化を鋭敏に捉えることが可能であった。

作成した植生図から、森林限界は約2300mから2600mの範囲にあり、先端部分はカラマツやダケカンバなど先駆樹種によって構成されていた。標高が下がるにつれて常緑針葉樹であるシラビソが増加し、標高に伴う遷移段階の変化が明らかとなった。



- カラマツ、ダケカンバ(遷移初期)
- 常緑針葉樹、カラマツ、ダケカンバ(遷移中期)
- 常緑針葉樹(遷移後期)
- ▨ その他

### 2. 高山帯の植生

#### 目的と方法

森林限界より高標高に位置する高山帯は気候変動の影響を受けやすいと考えられるため、基礎となる高山帯の垂直分布を明らかにした。2016年に富士山科学研究所、静岡県、静岡大学の共同事業として、各登山道の植生調査を実施した。

#### 結果

標高に伴い植生の変化が見られ、明瞭な垂直分布が明らかとなった。特にオンタデは標高約3000m付近に分布のピークがあり、気温と密接な関係があることが示唆された。今後の長期的調査を通じて、富士山高山帯での気候変動と植生変化の関係を明らかにし、保全に寄与する情報を提供する。

